

第四十章 ウクライナー軍の反撃

たった四両の奇妙な戦車にソシア軍は電撃特別軍事作戦で占領したウクライナー共和国の一部の州から撤退せざるを得なくなった。ウクライナー軍はもちろんのこと元喜劇役者の大統領ダレデモスキーを侮っていたこともあったが、まさかの横槍が入ろうとは夢にも思わなかったのだろう。

ソシア軍はまるでウクライナー軍に武器弾薬はもちろんのこと戦車、装甲車、通信中継車、トラックやジープまで供与するために撤退したようなものだった。しかし、やっかいなものを残した。地雷だった。

地雷は恐怖の武器だ。兵士、市民関係なくその人たちの足をもぎ取る。殺しはしない。負傷した兵士や市民を助けるために数人の人手が必要となる。そこを襲うか逃走の時間稼ぎに使う。もちろん戦争が終わった後も地雷を知らない幼子の命を奪う。

ウクライナー共和国大統領ダレデモスキーが奪回した要衝都市ヘルトクを訪れて側近や特殊部隊長につぶやく。

「何が幸いするか分からないものだな」

地雷の製造や敷設は国際ルールで禁止されてはいるがソシアは条約を批准していない。それ

はさておき地雷を道路などに敷設して撤退するのは悲しいことだがソシアの戦術だ。

道路がぬかるんでいたのでも地面を掘らずに地雷を設置した。つまり地雷自体の重みで地中に沈むからだ。ところがここに埋めたぞと言わんばかりに凹みができるのでどこに地雷があるか明らかだった。

「ほとんどの地雷を撤去しました」

部隊長が応じる。

「しかし、油断は禁物だ」

「大統領のおっしゃるとおりです。避難していたヘルトク市民には戻らないよう指示しました」

「本部隊も安全を確認してから市内に入るように」

「承知しております。長居は禁物。大統領、首都にお戻りください」

国営放送局スタッフのヘルトク市奪還の映像撮影が終了する。

*

ソシア軍は戦闘を避けてインフラ攻撃に専念する。病院や発電所や学校やショッピングモールへの攻撃が激しくなる。停電や食糧不足で市民生活はどん底に陥る。ウクライナー国民は疲れるが軍の戦意が落ちることはない。

ソシアに敗北して領土を占領されたら終わりだから必死の攻防を繰り返している。しかもソシアに攻め入ったうというのではなく死ぬか生きるかの瀬戸際に追い込まれている。しかもソシアに攻め入った

わけでもなく一方的に侵略されただけだった。

ソシアの国民からすれば対岸の火事のように見える。ところがウクライナー軍の強力な抵抗を受けて特殊軍事作戦が数日で終了するとの見込みが崩れて多数の兵士が戦死する。大統領の動員令が発表されると国民の一部、特に富裕層が国外に逃れる。

一方で特殊な戦車がウクライナー軍とともにソシア軍機甲部隊を次々と全滅させるという噂が広がる。プチレンコン大統領領や大統領報道官は否定するが、戦場から命からがら逃げ帰った兵士の報告が噂に拍車を掛ける。

「砲門が三本もある黄色と黒の縞模様の巨大な戦車だった」

「俺が見た赤い戦車も巨大で大砲は一本だったがクネクネしていた」

「青い戦車の大砲は短かったが二本あった」

「細くて小さな無数の針を持つ小さな戦車がいた」

いずれの戦車からも強烈な光線が発射されたと言う。恐怖のあまり興奮して発言する兵士はすぐ精神病院に収容されて取材や面会をできなくした。

ウクライナー共和国ではこれらの戦車そのものが英雄扱いされた。いや神格化された。突如現れてソシア軍を蹴散らすといつの間にか姿を消してしまふからだ。

やがてこれらの戦車がいよいよといまいと関係なくウクライナー軍は力強く占領地を奪還していく。他方、先に述べたようにソシア軍はいつイエロータイガーなどの奇妙な戦車が現れるの

第四十章 ウクライナ軍の反撃

かという恐怖心でまともな戦闘ができない。どんな戦車もイエロータイガーに見えてしまうから勝敗は明らかだった。

問題はこのような状況をソシア軍国防大臣が正確にプチレンコン大統領に報告しないことだった。逆にウクライナ国防大臣はダレデモスキー大統領に良い情報も悪い情報も正確に報告した。ダレデモスキー大統領はいい情報については急いで報告しないでもいいとたしなめるが、プチレンコン大統領には悪い情報はすべて抹殺されて届くことはなかった。

この差が反撃の強さになって表れた。ウクライナ国民は歯を食いしばる。ソシア国民は海外に逃亡する。

しかし、この結果プチレンコン大統領は当然ウクライナ国民の愛国心を腹立ちしく思うことになる。言い換えれば国民から熱狂的に慕われるダレデモスキー大統領に嫉妬する。だからウクライナ共和国の社会インフラを徹底的な破壊する命令を下した。自分の立場を守るために罪もない庶民を苦しめ死に追いやりとうとする。人の命を私物化する典型的な権力者、つまり最悪の独裁者となる。恐怖心を植え付けて戦意を粉々に破壊するのが独裁者のやり方だった。残念ながらウクライナ軍の反撃が思わぬ事態を招いてしまった。